

会議名	科学飼料協会第 384 回月例研究会 「リサイクル飼料利用の現状と安全性確保」
開催日時	平成 18 年 9 月 22 日 (金) ; 13 : 3 0 ~ 16 : 00
開催場所	馬事畜産会館 2F 会議室 (東京都中央区新川 2 - 6 - 1 6)
主催者	(社) 日本科学飼料協会
参加人数(概数)	約百名 (科学飼料協会会員の飼料メーカー・関係団体・府県研究機関、等関係者)
1. 会議の概要 (資料添付)	<p>農水省におけるこのプロジェクト研究のリーダーである講師により、食品残差を活用したリサイクル飼料の利用における技術開発の現状と安全性を確保するためのガイドライン、今後の研究の方向性について紹介された。</p> <p>講師：(独) 農業・食品産業技術総合研究機構 畜草研 機能性飼料研究チーム長 川島 智之氏</p> <p>1. 飼料自給率の農水省基本計画達成に向けて行動計画が策定され、工程管理、普及啓発、情報の収集・分析・提供、地域取り組みの支援が行なわれている。平成 18 年度には安全性確保ガイドラインの作成、認証制度の導入、食品残渣の排出やその飼料利用に関わる実態調査、栄養特性評価手法開発、指導者育成研修等の取り組みが行なわれている。これらの事業について民間の関心も高い。</p> <p>世界 (主として EC 諸国) , 国内事例の紹介。</p> <p>2. 食品残さ飼料化の条件と求められる技術開発 ; 制度・規則の遵守、生産コスト削減、安全性確保、嗜好性・栄養価値、良質豚肉、消費者イメージ、利用手間、環境問題、自負・自信。</p> <p>3. 飼養管理 ;</p> <p>1) 配合可能な残さの利用</p> <p>2) 成分変動が大きい多様な残渣の利用</p> <p>3) 飼料化処理 : (1) 乾燥法、(2) サイレージ化技術、(3) リキッドフィーディング。</p> <p>4. 安全性</p> <p>5. 環境</p> <p>6. 今後の問題</p> <p>7. 質疑から ;</p> <p>・大手配合飼料メーカーの参画が期待されていろいろ取り組まれているが、規模によるコスト高、成分変動、動物性飼料の規制、肉質への影響、安全性、イメージの克服、などの課題が多い。</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ・使う側（農家、飼料メーカー）の論理でなく排出側の論理で動いており、このようなことではリサイクル飼料はやがて破綻するだろうとのメーカー関係者の意見があった。 ・養豚側が安心して使えるリサイクル飼料の保障表示が必要。 ・リサイクル飼料工場の許認可に時間が掛りすぎ、経済的な負担も大きい（縦割り行政の弊害）。
2. 今後の研究開発分野として重要と思われる課題	<ul style="list-style-type: none"> ・リサイクル飼料活用のための地域的システムの構築に関わる技術的問題。
3. その他の発表課題で関心のあったもの	<ul style="list-style-type: none"> ・リサイクル飼料の飼料化処理について、乾燥には熱源エネルギーの問題が、サイレージ化には規模の問題があり、リキッドフィーディングが最も期待されよう。
4. 今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等	<ul style="list-style-type: none"> ・各種リサイクル飼料原料は、ガソリン代替燃料原料や発電エネルギー源との競合も考えられるので、提案される課題の「物」についてそのような観点からの検討も必要。
5. 会議の所感	<ul style="list-style-type: none"> ・この月例研究会としては珍しく大手飼料メーカー関係者の出席が多かった。しかし、リサイクル飼料利用について、畜産サイドから見れば、大企業の手がける問題ではなく、分社化あるいはベンチャー企業の立ち上げによって対応すべき課題と考えられる。
報告者	針生 程吉